

新妻先生を送る言葉

高山 陽子

新妻仁一先生は本学のアラビア語教育に尽力されただけではなく、国際関係学部多文化コミュニケーション学科設立にも大変ご尽力いただいた。限られた紙面において長期間にわたる新妻先生の本学でのご活躍をすべて振り返ることは不可能であるため、学科の設立とその後の展開に絞って送る言葉としたい。

本学科は設立当初、「世界一楽しい学科」という大胆不敵なキャッチコピーを掲げていた。個人的には「そんなのムリ…」と心の中で思いながらも、すでにポスターが印刷されてしまったので、「世界一楽しい学科」は如何にして実現するのか？を一応考えてみた。しかし、回答は出てくるはずもなかった。

どうするのか？と思っていたところ、当時の学科の教務主任であった新妻先生が、「とりあえず学生を辞めさせない！」という実現可能な目標を示してくれた。退学者を出さない、という目標はともすると後ろ向きに響くかもしれないが、実は学科の方針を定める非常に重要な言葉であった。それは脱落者を出さないような環境作りを意味していたからである。

本学科設立の目的は、多文化共生社会の実現を促す人材を育成することにある。多文化共生とは皆が不快な思いをすることなく安心して暮らしていける社会であり、そこで大事なのは、見知らぬ他者に手を差し伸べるといふ思いやりの気持ちである。言い換えれば、本学科が目指しているのは、一部の

突出した才能を持つ人材を育成するというよりも、「いっしょにやろうよ！」と声をかけられる人を多く育むことかもしれない。

こうした声掛けが最初から得意な学生もいれば、内気でなかなか自分から声を掛けられないという学生もいる。コミュニケーションと名乗る学科だからといって、コミュニケーション力ありますという学生ばかりではなく、コミュニケーション力をつけたいからこの学科に来ましたという学生も少なくない。コミュニティにうまく馴染めない場合、そのコミュニティから脱落してしまうことにもなる。そうならないような雰囲気はどうやったら作れるのか？を学科全体で考えてきた。

具体的には、学生同士が仲良くなるような機会をできるだけ設けてきた。一年次の「オリエンテーションゼミⅠⅡ」では、フィールドワークなどのグループワークを多く行わせたり、合同ゼミの回数を増やしてゼミを越えた場の共有を進めてきた。2012年の学科設立年にはイベントを2回行って、学科の特色が幾分か見えてきたと思われる。

新妻先生の熱意が最もよく表れたのはアジア祭の展示であると言える。6地域言語の学修成果を示すために、2012年に入学した学生が3年生になった2014年に学科としてアジア祭に初めて参加した。具体的な内容については、毎年刊行される『榎 KAYA 国際・多文化フォトジャーナル』に記載しているので詳細は割愛するが、学科としての参加を先導し続けたのは新妻先生であった。

ドラム缶ストーブを作りたい！モスクを作りたい！シャウルマを作りたい！パルミラ遺跡を作りたい！サナアを作りたい！と新妻先生のアイデアはとどまるところを知らないようであった。実際のところ、制作するのは新妻ゼミやアラビア語の履修生であり、新妻先生は現場監督のような感じであった。毎年のようにアジア祭の前になると、1号館12階のミーティングルームから学生たちの「きゃあきゃあ」という楽しそうな声が聞こえてくる。これは多文化コミュニケーション学科の「風物詩」である。制作過程を外からのぞいてみると、学生たちの意外な才能が垣間見えてくる。中東特有

の緻密な模様を忠実に再現する学生や、黙々とラクダを作る学生もいて、普段、どちらかと言えば消極的な学生ほどこうした制作の場では能力を発揮しているようである。

このように新妻先生は学科としての様々な可能性を見せてくれた。コロナ禍でフィールドワークやアジア祭の参加などは中断しているが、感染が終息した暁には新妻先生のレガシーを受け継いでいきたい。